

【研究ノート】

短期大学における朗読の実践

－「ごんぎつね」の朗読を通して得られた成果－

日本語コミュニケーション学科 鹿島千穂

抄録

本稿は短期大学部日本語コミュニケーション学科の選択科目「アナウンス技術演習」で実践した朗読指導により得られた成果を提示し、高等教育で朗読を行う意義を明確にするものである。履修生へのアンケート結果から、少人数クラスでの朗読の実践には一定の成果があることが見えてきた。現在初等教育で実施されている音読指導を基礎に、高等教育においても朗読指導を継続することが、学生の「話す力」の向上へとつながると主張する。

キーワード

朗読、音読、学校朗読、音声表現技術、学習指導要領、ごんぎつね

1. はじめに

人生において、人が作品を声に出して読む機会は大きく分けて二度訪れるのではないだろうか。一度目は小学校の国語の授業に関連する音読、二度目は大人になってから行う絵本の読み聞かせや生涯学習の一環としての朗読である。

筆者は日本語コミュニケーション学科で開講されている選択科目「アナウンス技術演習」で、朗読や絵本の読み聞かせを授業に取り入れている。朗読には「学校朗読」「家庭朗読・読み聞かせ」「市民朗読」「放送メディア朗読」「舞台朗読」の5つのタイプがあるが（原 2019：77）、短期大学で行う朗読はこのうちの「学校朗読」に分類されつつも日常的なものではなく、朗読を授業で実施している高等教育機関はさほど多くはない。

本稿は短期大学部日本語コミュニケーション学科の授業で実践した一連の朗読指導により得られた成果を提示し、初等教育や生涯学習ではなく、短期大学という高等教育の場で朗読を行う意義を明確にすることを目的とする。

2. 音読と朗読

2-1. 小中学校における音読と朗読

音読や朗読が授業で行われるようになったのは1998年の学習指導要領からである¹。小学校の学習指導要領には「易しい文語調の文章を音読し、文語の調子に親しむこと」が示され、中学校の学習指導要領には「目的や必要に応じて音読や朗読をすること」と明示された²。

音読指導の方法として、教室で国語の授業時間内に児童が声に出して読む他、小学校低・中学年では家庭学習用の「音読カード」を使用するのが一般的である。児童たちは音読カードを持ち帰って指定された箇所を音読し、各家庭でチェック欄に印を記入する³。「アナウンス技術演習」の履修生に尋ねてみると、このような形で音読の指導を受けた経験はあるのだが、朗読に挑戦したことはないと答える学生がほとんどである。

では、音読と朗読の違いはどこにあるのだろうか。渡辺によれば、声に出して読むことは全て音読であり、朗読は音読の一種ではあるが表現を意識したものである。学校教育では音読よりも高度なものを朗読と呼び、文の基礎的な読み方にとどまらず感情表現なども含まれる（渡辺2012:23）。また、中村は音読と朗読について、授業実践中での学習活動を表現する用語として機能してきたにもかかわらず、明確な識別がなされていない場合が多いと指摘する。その上で、音読と朗読を以下のように定義している（中村2012:24）。

音読＝理解のための音声化行為

* 最初は、ただ「声に出して読む」から始めるにしても、それが繰り返される過程で、内容の「理解」を伴うのが原則である。教室では、とりわけ教材に触れる最初の段階で、「理解のため」という目的が意識されず、単に声にするだけの学習者による音読が、単調に行われることが多い。

朗読＝理解をふまえた伝えるための表現行為

* 音読を段階的に繰り返してきた結果、初めて実現することが可能な他者に伝えるための表現行為である。読み手が一つの朗読を提示することは、内容解釈を提示することにも等しい。特に学校現場で学習者に表現行為としての域まで求めるのは、工夫と時間を要する。

中村の定義に沿えば、音読の目的は「理解すること」であり、朗読は理解の上に「表現すること」である。そして、表現行為の域まで高めるには相応の工夫と時間が必要であるため、教師が小中学校の教育現場で朗読の指導をするのはハードルが高いと言わざるをえない。短期大学の学生がこれまで朗読の指導を受けたことがないと答えるのも無理もないことであろう。

2-2. 生涯学習としての朗読

生涯学習としての朗読とは、前出の原（2019）の分類によるところの「市民朗読」にあたる。

2001年に発刊された斎藤孝の『声に出して読みたい日本語』がベストセラーとなり、社会人向けの朗読教室が開講されたり、朗読サークルが立ち上がったりと、2000年代初頭には朗読ブームが起きた。原によれば、生涯学習としての朗読への参加動機は、文学作品をじっくり味わいたい、読み聞かせの活動に反映させたい、退職後の会話の少なさから忘れてしまった自分の声を取り戻したい等が多い。そして、受講者は朗読が深まるにつれ、知的好奇心が刺激され、社会とのかかわりを求めていくという（原 2019：77）。このように、生涯学習として朗読を行う層は、日常生活の潤いや豊かさが主な目的であり、小中学校の教育現場における音読や朗読とは動機づけが異なる。

また、小中学校での音読や朗読のように国語の授業で作品の内容理解の一助として行われるものとは違い、朗読の知識や経験をもつ講師の指導のもと発声法や音声表現技術を習得し、発表会に向けて練習を重ねる。個人や団体によりレベルの差はあるにせよ、教育現場における音読や朗読よりも、比較的高度な内容を実践していると考えられる。

3. 短期大学での朗読—日本語コミュニケーション学科選択科目での実践を例に—

3-1. 「アナウンス技術演習（旧ヴォイストレーニング）」授業概要

筆者は放送局アナウンサーの経験を活かし、日本語コミュニケーション学科で「話す力」の向上を目的とした授業を複数担当している。そのうちの一つが「アナウンス技術演習」である。本科目は2020年度および2021年度は「ヴォイストレーニング」の名称で開講され、2022年度より「アナウンス技術演習」となった。履修者数は「ヴォイストレーニング」時の2020年度が10名、2021年度が5名、「アナウンス技術演習」となった2022年度は7名で、少人数できめ細やかな指導ができるのが特徴である。本科目は日本語コミュニケーション学科における1年次前期の必修科目「ビジネストーク演習」を発展させた内容であり、音声表現のスキルアップに関心が高い学生が履修する傾向がある。

「話す力」の基本は声である。「アナウンス技術演習」では声の基礎力を高めるために、放送局のアナウンサーが入社後の研修で使用するレベルの教材を作成し、腹式呼吸と滑舌を徹底的に練習する。また、天気予報やニュースの原稿を使用し、伝わる話し方の訓練を行う。特に、テキストを音声化する際には「イントネーション（抑揚）」「アクセント（高低・強弱）」「プロミネンス（卓立）」「スピード（速さ）」「ポーズ（間）」の5点を意識するよう技術面の指導に力を入れている。さらに、文学作品の朗読や絵本の読み聞かせを通して、音声表現技術に磨きをかける。

このように「アナウンス技術演習」で行う朗読の実践は、授業での指導内容と学生の履修動機という観点からみると、「学校朗読」でありながら「市民朗読」の側面をも併せ持つものである。

3-2. 朗読の実践で使用した教材—「ごんぎつね」

朗読する作品には、新美南吉の「ごんぎつね」を選んだ。本作品は小学校の国語の教科書に掲載されているため、履修生の誰もが一度は触れたことのある物語である。小学生の時に音読した

「ごんぎつね」の記憶を維持しつつもあらたに朗読という形での表現に挑戦することで、音読と朗読の相違点が浮かび上がり、音声による表現行為の本質が見えてくることを意図した。

朗読の実践には3週の授業時間を費やした。第1週は全体で「ごんぎつね」の作品分析を行った。特に登場人物のキャラクターと心情の分析には十分な時間を割き、解釈通りの世界観を聞き手に提示するために、これまでの授業で習得した音声表現技術をどのように使用したらよいかを指導した。第2週は2つのグループに分かれ、それぞれのグループでディスカッションしながら物語の解釈を続け、第1場面から第6場面の役割分担を決めた。第3週は前半をグループでの読み合わせに使い、後半を発表の時間とした。

3-3. 得られた成果

3週にわたる朗読の実践後に行った履修生へのアンケートをもとに、朗読で得られた成果を「物語の深い解釈」「音声表現技術の使用」「一体感の共有」の3つに分けて詳述する。

3-3-1. 物語の深い解釈

朗読の前段階として作品分析を丁寧に行ったことで、作品への理解が深まったというコメントが多数みられた。

- ・ ごんぎつねは小学校の時に読んで以来、感動する作品だとは知っていたけれど、触れてこなかったのがあまり覚えてはいないシーンもありました。今回発表するにあたって深く解釈するというで意見を出し合ううちに、感動するという一言では片付けられない、ごんの性格や兵十の気持ちなどが知れて、この作品が好きになりました。
- ・ 物語を、ここまで登場人物の気持ちや流れを押さえて読んだことが初めてだったので、とても新鮮でした。
- ・ 読み合わせで皆の違う解釈の読み方を聴き、物語のイメージが格段と広がりました。新たな読み方をどんどん発見していくため、朗読練習がとても楽しかったです。
- ・ チームで考えていた解釈と別チームが考えていた解釈が違う場面もあって、聞いていておもしろかったです。

作品の解釈に正解や間違いはない。登場人物の心情に思いを馳せたり、言葉の意味を深く考えたりしながら、グループ内で意見を出し合って解釈を進めるうちに、これまで「知っていた」はずの物語の深層に触れ、あらたな一面が見えてくる。これが、朗読を通して得られた大きな成果である。

3-3-2. 音声表現技術の使用

朗読前に丁寧な作品分析を行ったとしても、解釈通りの世界観を聞き手に提示するためには、高度な音声表現技術が要される。授業で習得した表現技術を駆使して発表に挑んだことで気づき

を得たというコメントもあった。

- ・ 人に聞かせるために間や強弱で抑揚をつけて、いろいろな工夫をした。正しいアクセントや噛まないことは、音読でも必要かもしれないが、聞く人に情景を浮かばせたり、楽しんだり、ひきこませたりするために朗読は気持ち面での工夫がたくさん必要だった。
- ・ 読み方一つで物語の印象を変化できることがとても面白いと感じました。特に、ごんのセリフの語尾のトーンの高さを変えただけで、ごん的心情ががらっと変化したことが印象に残っています。
- ・ ごんのセリフや心の声と、地の文とのトーンの違いや間、どこにプロミネンスをつけるかなど最後まで考えていましたし、なやみました。
- ・ 声のトーンや速さを特に意識して読めました。また、声の大きさを変えるには喉の開き方を変えると良いという発見がありました。大きく開くと、響く声になりやすかったです。
- ・ 他の人の発表を聞いていると、こんな読み方もできるのか、ここに間を置くんだと、新しい発見も多く、自分の中の表現の幅が広がった気がします。

毎回、授業の冒頭には腹式呼吸と滑舌練習を必ず行っていた。また、朗読の単元に入る前に、天気予報やニュース原稿を使い、「イントネーション（抑揚）」「アクセント（高低・強弱）」「プロミネンス（卓立）」「スピード（速さ）」「ポーズ（間）」の5点を意識して表現することの大切さを指導していた。上記のコメントからは、履修生がこのような練習の重要性を朗読の実践を通して体感できたことがわかる。

3-3-3. 一体感の共有

今回の朗読は、一人で作品を通して読むのではなく、第1場面から第6場面までの6つのパートを役割分担し、グループのメンバー全員で作品を読み上げる形式とした。その結果、グループでの一体感が味わえたという意見が散見された。

- ・ グループで1つの話をつなげるのが新鮮だった。
- ・ 全体の発表では、みんなで一つの劇を演じ終えたような達成感がありました。
- ・ 全員の発表では、各パートが自分の想像を超えた物語イメージで、よりこの物語が好きになりました。
- ・ 少人数だったからできた読み繋いでいく朗読は、一体感が生まれ面白かったです。それぞれ解釈は違うし、声も違うけれど、ひとつの物語をみんなで完成させた達成感もありました。

この感覚は、「市民朗読」の参加者に見られるものに共通する。前出の原は、市民朗読の受講生の間に「受講者同士の交流」という変化が見られたと述べるが（原 2019：83）、グループ全体で作品の解釈をし、読むパートの役割を分担し、互いにアドバイスしながら練習を重ね、息を合わ

せて読み上げるという経験は、力を合わせて一つの作品を作り上げたかのような達成感を生む。このような履修者同士のつながりは、高等教育の現場で朗読を行う当初の目的ではないが、協働作業を通して得られた思いがけない副産物である。

3-3-4. 朗読という表現行為

最後に、小学校の国語の授業で行った音読と比較することで、朗読とは何かを体感した履修生がいたことを付け加えたい。

- ・ 今まで小学校の頃から国語の時間などでやってきた音読は、内容理解と読み方の確認の為にやっていたように思いましたが、朗読では聞き手が存在したので、聞き手にストーリーの内容をどれだけ伝えられるのかが鍵になったのかと思いました。
- ・ 朗読は、感情を込めて話すだけでなく、物語に対する自分の解釈を声で表現する場でもあると感じました。

朗読は、読み手が解釈した物語の世界観を声だけで表現するものである。そこには聞き手の存在が不可欠である。このような朗読の本質に触れたコメントを目にできたことは喜ばしいことである。

4. おわりに—高等教育で行う朗読の意味—

本稿では高等教育で朗読を行う意義を明確にするために、短期大学部日本語コミュニケーション学科の選択科目「アナウンス技術演習」で実践した一連の朗読指導により得られた成果を提示した。履修生へのアンケート結果から、少人数クラスでの朗読の実践には一定の成果があることが浮かび上がった。このことから、現在実施されている小学校の音読を基礎に、高等教育においても朗読という形で指導を継続することが、学生の「話す力」を伸ばすために有効なのではないかと考える。たとえば、朗読を通して得られる、張りのある声や明瞭な発話法は、他者に自身の意図や思考を伝えたり、プレゼンテーションで相手の理解を促したりする際に役立つだろう。また、感情を声に乗せる技術の習得は、感情の行き違いによるコミュニケーションの齟齬を防ぎ、的確にニュアンスを伝える力へとつながるはずである。

学生たちが社会へと羽ばたく前に、一生の財産となる「話す力」を身につけるための方法の一つとして、高等教育でも朗読の指導を行うことが必要なのではないだろうか。

1 滝野 (2013) は学習指導要領上の音読の位置づけの歴史を「音読退行の時代」(昭和 22 年版～昭和 33 年版)、「音読復権の時代」(昭和 43 年版～平成元年版)、「音読定着の時代」(平成 10 年版～平成 20 年版)の 3 つに区分している。それまでの学習指導要領では軽視されていた音読が、1998 年(平成 10 年)の学習指導要領にお

いて「定着する時代」へと至ったと述べる。

- 2 小学校の学習指導要領では音読と朗読の関係は次のように示されている。
 - ア 語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。(低学年)
 - ア 内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読すること。(中学年)
 - ア 自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をすること。(高学年)高学年での音読と朗読の違いについて、『小学校学習指導要領解説 国語編』には「音読が、文章の内容や表現をよく理解し伝えることに重点があるのに対して、朗読は、児童一人一人が自分なりに解釈したことや、感心や感動したことなどを、文章全体に対する思いや考えとしてまとめ、表現性を高めて伝えることに重点がある」とある。
文部科学省 HP 学習指導要領「生きる力」第2章 各教科 第1節 国語
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/koku.htm (2023年1月27日最終閲覧)
- 3 音読指導の重要性を説く土居は、音読指導とひと口で言ってもその実態は様々であり、現状の学校教育においてしっかり「指導できている」とは言えないと述べる。音読カードを渡して「家でやっておくように」と指示するだけでは到底「指導」しているとは言えず、教師がきちんと音読を「指導」できるようになっていくべきだと主張する(土居 2021: 19-21)。

〈参考文献〉

- 土居正博 (2021) 『クラス全員のやる気が高まる！音読指導法－学習活動アイデア&指導技術－』明治図書
- 原良枝 (2019) 「生涯学習における朗読の可能性」甲南女子大学研究紀要Ⅰ 第55号 pp.77-84
- 中村佳文 (2012) 『声で思考する国語教育 〈教室〉の音読・朗読実践構想』ひつじ書房
- 瀧野直人 (2013) 「音読の指導観に関する一考察：戦後国語教育における音読・朗読・群読の位置づけから」『信大 国語教育』第22巻 pp.11-21
- 渡辺知明 (2012) 『朗読の教科書 豊かな日本語表現の技術』パンローリング